様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３１３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００３４８

研究課題名（和文）モダニズム期のアメリカ文学におけるケアの契機としての傷つきやすさ

研究課題名（英文）Vulnerability as a Beginning of Care in American Modernist Literature

研究代表者
井出　達郎（Ide, Tatsuro）

東北学院大学・文学部・准教授

研究者番号：６０６３５９８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、自律した個人に重きを置いていた合衆国において、とりわけアメリカの伝統的な自己のあり方が大きく揺らいだ20世紀前半のモダニズム期の文学作品群に注目し、「傷つきやすさ（vulnerability）」のモチーフが他者への「ケア（care）」という積極的な意味の物語を生み出しうることを浮き彫りにした。最終的に、F.スコット・フィッツジェラルド、レイモンド・チャンドラー、ヘンリー・ミラー、J. D. サリンジャーという4人の作家の作品をこの視点から読み直すことで、独立した個人の理念からは克服すべきものとされてきた「傷つきやすさ」という主題からアメリカ文学を読み直す可能性を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来は内省的な個人というイメージから捉えられがちだったモダニズム期のアメリカ文学研究において、「傷つきやすさ」と「ケア」から捉え直す新しい視点の有効性を明らかにした。特に自律した個人への価値観の理想を強化してきたと見なされがちな4人の男性作家の作家群を読み直すことで、とりわけ男性において克服する対象とされがちであった2つの主題の新たな可能性を提示することができた。そのうえで、現代の新自由主義が前提としている自律的な個人像の批判的な再検討や、災害やコロナ禍の中で露呈した人間の生のあやうさをめぐる議論とのつながりを示唆することで、主題が有する現代的な意義を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This research project reveals that the motif of vulnerability can be read as the beginning of care for the other in American literature during the period of modernism when the notion of self was radically questioned. Through reading literary works by four modernist writers--F. Scott Fitzgerald, Raymond Chandler, Henry Miller, and J.D. Salinger--it highlights the possibility of interpreting American literature in terms of vulnerability, which has traditionally been considered a negative condition to overcome from the perspective of the ideal of independent individual.

研究分野：英米文学

キーワード：傷つきやすさ　ケア　モダニズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

21 世紀の初頭より、不確実性やリスクにさらされるものとしての人間のあり方を問う「傷つきやすさ（vulnerability）」という主題が注目されるようになった。もともとこの主題をめぐる研究は、1980 年代、Robert E. Goodin の *Protecting the Vulnerable* (1985)といった研究によって、それまでは強さや自律の欠如といった否定的な意味で使われていたこの語が表す状態が、他者との関係をめぐる倫理的な問いを誘発させる積極的な意味を持ちうるという考えから始まった。当時この主題は、伝統的な意味で「傷つきやすい」とされていた女性や植民地の人々を考察する視点とされることが多かったが、世紀転換期において、自然災害、テロ、移民、格差の問題など、危機管理が及ばない出来事の連鎖を通じ、Marianne Hirsch がいう“Vulnerable Times”の中に生きる人間そのものを考える大きな視点へと発展していく。そして本研究開始当初、この「傷つきやすさ」という主題は、Brené Brown の TED での講演“The Power of Vulnerability”(2010) に端的にみられるように、語がもともと含む “ability”の「力」という意味を強調しながら、権力への抵抗や他者への開かれといった、より積極的な意味の可能性と共に探求されていた。

この「傷つきやすさ」をめぐる研究は、学際的な広がりを見せながら、倫理や責任といった普遍的な問いや、Emmanuel Levinas の他者および Judith Butler の生のあやうさをめぐる現代思想の問いなど、多種多様に関連づけられていた。その問いの中の一つが「ケア（care)」である。Joan Tronto が端的に 「ケア」を「他者の傷つきやすさへの注目」と定義づけているように、「ケア」は「傷つきやすさ」によって必然的に誘発される概念かつ実践として、特に自律した個人という自己のイメージを根源的に揺さぶるものとして注目されていた。

こうした「傷つきやすさ」と「ケア」という 2 つの主題の重要性の高まりの中、研究代表者は当時、自身の専門領域であったアメリカにおけるモダニズム期の文学作品を関連する視点から考察していた。2017 年の F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* についての論考では、物語の語り手ニック・キャラウェイが冒頭で述べる“vulnerable”という語、および「キャラウェイ」という名前から暗示的に読みとれる“care”という語をキーワードとし、語り手であるニックが語りの対象であるジェイ・ギャツビーと「傷つきやすさ」を通して関わり合い、その結果として自己と他者の境界が揺らぐ「ケア」というべき関係にいたる、という解釈を提示した。2019 年の Henry Miller の *The Tropic of Cancer* の論考では、Miller の自伝的小説を Benjamin Franklin の *The Autobiography of Benjamin Franklin* と対照させ、後者が自律した個人としての自己を強烈に立ち上げるのに対し、前者がそうした自己のあり方をどこまでも逸脱していき、その自己の不安定ゆえに積極的に他者と関わっていくことになることを論じた。

２．研究の目的

本研究の目的は、モダニズム期のアメリカ文学作品において、伝統的なアメリカの理念からは克服すべき対象とみなされる「傷つきやすさ」というモチーフが、他者との「ケア」の関係への契機となるという積極的な可能性を秘めていることを明らかにすることであった。

もともとイギリスから自らを切り離して独立したアメリカは、対外的には孤立主義をとりつつ、国内では自律した個人を理想とみなし、自分の生まれに関係なく「自分で自分をつくりあげる」という「セルフメイド・マン（self-made man)」という考えが大きな影響力を持っていた。その結果、上野千鶴子が指摘しているように、国民皆保険といった「ケア」の制度の発展が長いあいだ抑えられることになった。この特質はアメリカ文学にも色濃く反映されており、*The Leatherstocking Tales* のナッティ・バンボー、*The Adventures of Tom Sawyer* のトム・ソーヤー、*Adventures of Huckleberry Finn* のハックルベリィ・フィンといったモダニズム期以前の古典作品の主人公の多くは、家族から自分を引き離した「独身者」や「孤児」として、「セルフメイド・マン」という理念を強力に体現し続けてきた。言い換えれば、個人の自律性を重視するという特質の中で、「傷つきやすさ」を強力に退けようとする傾向があったのである。それに対してモダニズム期のアメリカは、そうして退けてきた「傷つきやすさ」が噴出した時代であるといえる。当時のアメリカは、他国との関係から孤立主義を放棄せざるをえなくなり、同時に、大量破壊兵器が本格的に導入された第一次世界大戦、また 1929 年からはじまる世界恐慌により、個人の力の小ささを痛感させられ、アメリカが伝統的に重きを置いてきた自律した個人という理想が大きく揺るがされることになった。それは当時の文学作品にも様々なかたちで影響を与え、意識の流れ、複数の語り手、コラージュの手法といった新しい文学上の表現に結実していく。

このモダニズム期の「傷つきやすさ」は、従来の批評においては、「ロストジェネレーション」といった表現にみるように、伝統的な自己のあり方の喪失といった意味で、消極的なものとして読まれることが一般的であった。それに対して本研究は、そうした「傷つきやすさ」がむしろ伝統的な自律性に基づいた自己のあり方を揺るがし、他者との「ケア」という関係を開く積極的な意味での契機になることを明らかにすることを目指した。研究開始当初の研究代表者による F. Scott Fitzgerald と Henry Miller の作品についての論考は、表向きにはセルフメイド・マン的

な自己のあり方の崩壊を描いていながら、他方ではそれが他者との特異な関係を誘発する契機となる可能性を提示していた。そこには、単に自己のあり方の崩壊をみる読み方では見えてこない、「傷つきやすさ」から発生する「ケア」という主題の可能性が秘められている。当時すでに、文学作品を「傷つきやすさ」という視点から読む先行研究は、Jennifer Travis の *Danger and Vulnerability in Nineteenth- Century American Literature: Crash and Burn* (2018)、Jean-Michel Ganteau and Susana Onega の *Victimhood and Vulnerability in 21st Century Fiction* (2017)、Jean-Michel Ganteau の *The Ethics and Aesthetics of Vulnerability in Contemporary British Fiction* など、すでに書籍レベルの研究がなされてはいた。その一方で、アメリカのモダニズム期の文学を包括的に扱った研究はまだ存在していなかった。本研究は、こうした先行研究を発展させながら、「傷つきやすさ」がとりわけ鮮烈に問題化された時代としてモダニズム期を位置づけ、それゆえにそこから生み出される「ケア」の主題の物語の強度の強さを提示することを目的とした。

この大枠の目的の下、最終的な成果として考えていたのは次の 3 点である。

(1)「傷つきやすさ」を契機とした「ケア」の物語としてのモダニズム作家の再読

具体的には、現時点で論文のかたちになっている F. Scott Fitzgerald の「傷」をめぐる論考と Henry Miller の「自伝」をめぐる論考を手掛かりに、他のモダニズム期の作家の作品において独自のあり方で「傷つきやすさ」と「ケア」の関係が描かれていることを探る。

(2)モダニズム文学研究の再検討

これまで自我の揺らぎや喪失として否定的に特徴づけられてきたモチーフが、「傷つきやすさ」を契機とした他者との「ケア」という積極的な関係を発生させる可能性を持ちうることを明らかにする。

(3)アメリカ文学史への応用可能性

本研究では特にモダニズムを「傷つきやすさ」が国家的なレベルにおいて顕著に現れた時代であると定義し、考察の範囲を限定するが、その作業を通し、モダニズム以前と以後の文学作品を同様に読み直す可能性も考慮していくことで、将来的にアメリカ文学史全体への応用可能性を示していく。

３．研究の方法

研究方法は以下の 3 つを軸とし、最終的にそれらを著作レベルの論考としてまとめ上げることを目指した。

(1)「傷つきやすさ」および「ケア」という主軸となる二つのキーワードについての先行研究を調査、それを通した理論的な土台の構築

二つのキーワードの性質上、社会学や哲学といった文学以外の分野におけるこれまでの動向を探ることは必須であった。特にそれをモダニズム期のアメリカ文学作品の読み方に応用するため、少数派および家庭のケア労働の文脈から本格化した両キーワードの研究の起源を踏まえつつ、「傷つきやすさ」および「ケア」とは何かという問いを根源的に考察する論考を調査し、他者との「ケア」という関係を開く積極的な契機としての「傷つきやすさ」という、本研究の理論的な土台を構築していった。

(2)モダニズム研究の先行研究を調査し、本研究との関連性およびそこから浮き彫りになる本研究の独自性の明確化

本研究はまず、対象範囲としたアメリカにおけるモダニズムについて、社会的状況および「モダニズム」という語についての論考から、「傷つきやすさ」が浮き彫りになった時代と定義づけることを目指した。

加えて、モダニズム研究それ自体の先行研究の動向を概観する中で、本研究が 21 世紀初頭から本格化する「ニュー・モダニスト・スタディーズ」と呼ばれる動向と共鳴していることが明らかになった。この動向は、従来主に György Lukács らの論考に基づいたモダニズム期の文学研究、すなわち孤独で、非社会的で、他者との関係の構築の不可能な個人のイメージから読む文学研究という前提を問い直し、モダニズム期の文学作品を読む新たな視点を探ることを目的としていた。本研究はその一つの試みとして自身を位置付け、同時に自らの持つ独自性の明確化を目指すことになった。

(3)モダニズム期のアメリカ文学作品の選定と読解

(1)と(2)を補助線にしたうえで、モダニズム期のアメリカの文学作品において、本研究の「傷つきやすさの契機としてのケア」という主題と共鳴する作品を選定した。まず「傷つきやさ」と「ケア」というキーワードを直接抽出することができた F. Scott Fitzgerald を出発点とし、すでに論考を行っていた Henry Miller を含み、主題に関連する作家の絞り込みを行った。その際、それぞれの作品に主題を強引に押し付けるのではなく、逆に主題の可能性を広げる独自性を持つ作品を探り出すことに留意した。

結果として、以下の 4 人の作家の作品を取り上げることになった。特に、「傷つきやすさ」と「ケア」というキーワードの可能性の豊かさを探究し、それらが従来結び付けられがちであった少数派および家庭のケア労働といった文脈を押し広げようとする中で、必然的にそこに対照される、自律的な個人の男性を表向きは描いている作品に注目することになった。

①F. Scott Fitzgerald
Fitzgeraldの*The Great Gatsby*より作中で使われている「傷つきやすさ」と「ケア」という2つのキーワードを取り出し、その結びつきを論じることで、本研究の大枠となる「ケアの契機としての傷つきやすさ」を取り出した。そのうえで、2020年の石塚久郎編『医療短編小説』に収録されたFitzgeraldの2つの短編に着目し、編者の石塚が指摘する医療人文学という分野から作品を読むことで、主題を論じるうえでのFitzgerladという作家がもつ重要性を補強した。
②Raymond Chandler
Fitzgeraldから取り出した主題の可能性を広げるうえで、探偵小説というジャンルに着目し、その中からChandlerの作品を選定した。それは、「ケア」とは狭い意味での人間の交流を超えた「世界」に対するものではなければならないというJoan Trontoのケア論が、このジャンルがそもそも「世界」に対する「関心（care)」が始まったという事実と強く響き合うのではないか、という着想による。加えて、Chandlerの長編*The Long Goodbye*が*The Great Gatsby*と構造において類似しているという先行研究があり、*The Great Gatsby*から主題を取り出した本研究の視点からその類似点の発展の可能性を探った。
③Henry Miller
研究開始当初にすでに論考があったMillerの作品の読解を本研究の主題から発展させることを目指した。その際、Millerの自伝的小説という書き方に着目し、Michel Foucaultの「自己への配慮（the care of the self)」という概念を補助線に、その「自伝（autobiography)」という要素について、「自己（auto)」の「生（bio)」の破綻を描いているような体裁が、「傷つきやすさ」とそこから生じる「他者への生」への関心となっていることについて考察した。
④J. D. Salinger
研究を進めていく中で、研究開始よりも前の段階で論考を発表していたSalingerの作品、特に不在や死者をめぐる作品を改めて選定した。それは、Millerについての研究の中で、「傷つきやすさ」と「ケア」というキーワードが「生」という領域に限定されうるのか、という問いが生まれてきたためである。もともと論じていたSalinger作品に描かれる不在のものや死者を新たに読み直し、2つのキーワードが不在や死者という領域にも関わりうる可能性を探った。

４．研究成果
取り上げた4人の作家の読解を通して、モダニズム期のアメリカ文学において、「ケアの契機としての傷つきやすさ」という一視点の有効性を説得的に提示できる論考を提示することが可能になった。従来、「傷つきやすさ」と「ケア」というキーワードが少数派や彼らのケア労働という文脈のみに限定されがちであるのに対し、これらの作品群は、一見するとその反対の自律的な個人を描き出しているように見えながら、その中に「傷つきやすさ」から始まる他者とのつながりの契機こそを示している。この読み方は、内省的な個人というイメージから読まれがちであった従来のモダニスト・スタディーズを問い直し、21 世紀初頭より本格化されたニュー・モダニスト・スタディーズの流れの一つとして、モダニズム期のアメリカ文学を再読する有力な一視点となりうるものである。残念ながら研究課題期間内においては書籍として発表することができなかったものの、まとめたものを今後改めて書籍として発表する予定である。
本研究で取りあげた4人の作家の作品読解は、「ケアの契機としての傷つきやすさ」という本研究の主題の有効性を証明しながら、その個々の読解は、主題に含まれる豊かさを同時に示している。本研究はその豊さの具体的な内実を以下のように明らかにすることができた。
(1)F. Scott Fitzgerald
まず*The Great Gatsby*から、作中で使用されている「傷つきやすさ」と「ケア」という表現を直接抽出し、「ケアの契機としての傷つきやすさ」という主題の土台とした。そして本来は自律的な自己のあり方であるセルフメイド・マンの失敗の悲劇と読まれてきた物語を、「傷つきやすさ」が契機となった他者とのつながりの物語になっていることを論じる視点を提示した。
次に、『医療短編小説』に収録されていた“An Alcoholic Case”と“Family in the Wind”という2つの短編から、Fitzgeraldという作家における医療人文学という分野とのつながりの強さを確認するとともに、「傷つきやすさ」から始まる「ケア」が一般化された「症例（case)」ではなく、個々の個別具体性に対してその場その場での応答が求められるということ、すなわち「単独性への応答責任」でなければならない、という論点を考察することができた。この考察は日本F・スコット・フィッツジェラルド協会の協会誌『フィッツジェラルド研究』第5号にて単著論文としてまとめることができた。
(2)Raymond Chandler
Chandlerの作品からは、Fitzgeraldを出発点とした本研究の主題を、私立探偵小説というジャンルが「関心（care)」を向ける「世界」という領域において発展させた。
まずChandlerの長編第一作*The Big Sleep*について、先行研究における分析型推理小説の安楽椅子探偵とハードボイルド小説の私立探偵の比較をもとに、後者の「世界の中に在ること」という特徴を「傷つきやすさ」と捉え直し、それが必然的に孕む他者の関わり合いを「ケア」という視点から考察した。最終的に、Chandlerの探偵がJohn T. Irwingのいう「自分自身のボス」という体面をとりながら、それが自己完結的な自己のあり方を維持し続けることができず、従来の探偵小説では関心から排除されるような依頼者、被害者、犯人との「ケア」の関係に導かれて

いくという構図を探り出した。
　次に同じ探偵を主人公とした長編 *The Long Goodbye* において、従来の探偵小説では描かれない時間の流れの中にいるという事実を突きつけられ、自身の「傷つきやすさ」と直面することで他者と関わらざるを得なくなっていく、という事態を考察した。「世界の中に在ること」を Janna Thompson の「時間的な傷つきやすさ」という視点から発展させ、「自分自身のボス」として生きていこうと試みる探偵の身振りの中に、不可避に他者とのケアの関係があらわれてくることを明らかにした。
(3)Henry Miller
　Miller の作品では、同じ主題を、「生（life)」という領域において発展させた。
　まず実質的な長編第一作である *Tropic of Cancer* において、Miller が自身で名づけている自伝的小説という形式が、Benjamin Franklin の *The Autobiography of Benjamin Franklin* とは対照的に、「父」を中心とした「生の再生産」に向けられた生からの逸脱を描いていることを考察した。そして最終的に、Franklin 的な生からみれば「傷つきやすさ」を抱えたその生が、Lee Edelman のいう「生殖的未来主義」に対する抵抗と響き合い、「生産」からこぼれ落ちる生へのケアになっているという読み方を提示した。
　次に長編 *Sexus* において、従来は批判の対象であった Miller 作品の主人公の「なにもできないじぶん」（吉本隆明）にしかみえない受動的(passive)な生のあり方を、本研究の「傷つきやすさ」というキーワードから読み直す可能性を探った。その中で、Giorgio Agamben の「非の潜勢力」という概念を補助線に、何にもなり得ないという生が、「傷つきやすさ(vulnerability)」にもともと含まれる「力」と呼応するように、自分を開くという一つの「力」となり、それゆえに他者と共に苦しむこと（co-passion）へ開かれていく、という読み方を提示した。
(4)J. D. Salinger
　Salinger の作品では、Fitzgerald、Chandler および Miller の一連の考察を通じて生じた、「傷つきやすさ」と「ケア」はこの「世界」の「生」に限定されるものなのかという問いをめぐり、本研究の主題を「死者」という領域において発展させた。
　まず短編“For Esmé–with Love and Squalor”において、そこに描かれる帰還兵の PTSD の症状から、「傷つきやすさ」と「ケア」の問いとは「そこにいない存在」をめぐっても起こり得るものであることを確認した。
　そのうえで長編 *The Catcher in the Rye* において、すでに先行研究で論じられている死者との関わりの物語という解釈を、「傷つきやすさ」と「ケア」というキーワードから読み直した。その中で、主人公のホールデンが間接的に曝け出す死者に対する無力感が、単に消極的な意味での「何もできなさ」ではなく、かえってその死者の存在を強烈に喚起しているという積極的な意味を持ちうるものであるという考察を行い、生者と死者の間にあるケアの 1 つのかたちであるという解釈を提示することができた。
　また、今後著作としてまとめる予定の上記の内容の他に、今後の発展の足掛かりとなりうる発表を国際学会にて2件行うことができた。2023年のThe 16th International Fitzgerald Society Conference では、Fitzgerald の *Tender Is the Night* について、本研究の Fitzgerald 研究で発見した「時間的な傷つきやすさ」と「単独性」という視点を用い、精神科医の失敗として読まれてきた物語が、「時間的な傷つきやすさ」を契機としたケアの物語として読み直しうるという解釈を発表した。そして同年、“vulnerability”を大枠のテーマとした The 27th Biennial AISNA Conference では、現代作家の Charles Yu’s の短編“Standard Loneliness Package”について、本研究の Miller 研究で発見した「受動性」という視点を用い、グローバルな経済格差の構図の中で「何もできなさ」をかかえる主人公が、その「傷つきやすさ」を通して他者に開かれていく可能性を論じることができた。学会が予め設定したテーマの枠組みのためにモダニズム期ではない作品を扱ったものの、当初の研究目的に含まれていたアメリカ文学史全体への応用可能性を考えるうえで重要な機会となった。加えて、この会議を通して vulnerability 研究の第一人者である Jennifer Travis 氏との直接の交流を持つことができた。
　偶然にも本研究は、開始した 2020 年度にコロナ禍と重なることになり、人間が根源的に抱える「傷つきやすさ」の露呈とそこから必然的に要請させる「ケア」の必要性への関心と共鳴することになった。その意味で本研究の成果は、研究対象の範囲として設定したモダニズム期という時代を超え、強い現代性を持つものになった。予定している書籍とともに、その現代性を備えた問いについて、今後も探究を続けていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 井出達郎	４．巻 5
２．論文標題 作家論としての「ケアのはじまりとしての傷つきやすさ」 ――「アルコール依存症の患者」と「家族は風のなか」における個別なものへの応答	５．発行年 2022年
３．雑誌名 フィッツジェラルド研究	６．最初と最後の頁 24-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Tatsuro Ide
２．発表標題 ‘I’ as an Experience of Radical Passivity in Charles Yu’s "Standard Loneliness Package"
３．学会等名 The 27th Biennial AISNA Conference, “Vulnerabilities: Weaknesses, Threats, Resilience in the U.S.A. and in Global Perspective”（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Tatsuro Ide
２．発表標題 "Where did it begin?": Care for Singularity through Temporal Vulnerability in F. Scott Fitzgerald's Tender Is the Night
３．学会等名 The 16th International Fitzgerald Society Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 井出達郎
２．発表標題 ケアのはじまりとしての傷つきやすさ再考 ――『グレート・ギャツビー』における“fix”をめぐる時間の視点から
３．学会等名 2021年度F.スコット・フィッツジェラルド協会全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 井出達郎
２．発表標題 “Why don't you try to write?”――ヘンリー・ミラー『セクサス』における非の潜勢力としての「作家」
３．学会等名 2021年度ヘンリー・ミラー協会大会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関